

平成 28 年 2 月 8 日

熊本市市長 大西一史 様

一般社団法人 日本建築学会九州支部
支部長 黒瀬 重幸



旧熊本貯金支局（熊本市花畑町別館）の保存に関する要望書

拝啓 時下ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。日頃より、本会の活動につきましては、多大なご協力を賜わり、心より感謝いたしております。

さて、市長におかれましては、先般熊本市中央区花畑町にあります旧熊本貯金支局（熊本市役所花畑町別館）を取り壊して、新築を予定されていることを市議会で述べられました。しかし、この建物は日本の近代建築史はもちろん熊本市の歴史を語る上でも重要な建物であります。どうかその保存についてご再考くださいますよう要望申し上げます。

旧熊本貯金支局の建物については、すでにご承知かと思いますが、別紙にありますように、日本の近代建築史上重要な建築家で、通信省営繕課の技師として優れた建築作品を残した山田守の代表作の一つです。その評価については、『日本近代建築総覧』（1980（昭和55）年）においても、「価値の高い近代建築」として記されております。また熊本市中心部にあって、再開発された歩兵二十三連隊跡地に作られた熊本の近代建築のひとつとして、さらに旧熊本市庁舎や旧日本勧業銀行熊本支店とともに、第二次大戦中の熊本大空襲にも残った熊本の歴史を語る上でも重要な建築であります。熊本市中心部の景観を形成する上で大きな役割を果たしてきましたし、市民から愛されてきた建築です。この建物を保存活用するための市民運動も起こっている由、お聞きしております。日本建築学会としましては、このような貴重な建築遺産が失われてしまうことは、非常に残念なことであります。市長におかれましては、この貴重な建築のもつ高い文化的価値と歴史的意義についてあらためてご理解いただき、本建築の保存活用を考慮されるべく、格別のご配慮をお願い申し上げます。

なお、日本建築学会九州支部としましては、この建築の保存活用に関して、学術的あるいは技術的観点から、惜しみなく協力いたしますことを申し上げます。

敬具

平成 28 年 2 月 8 日

旧熊本貯金支局（熊本市役所花畑町別館）に関する見解

一般社団法人 日本建築学会九州支部
建築歴史・意匠委員会委員長
渡邊 道治

1) 建物の概要

旧熊本貯金支局（熊本市役所花畑町別館）は、昭和 11 年に竣工した熊本市中央区花畑町に現存する建物である。建物の規模は鉄筋コンクリート 3 階、地下 1 階で、戦後 4 階が増築された。延べ床面積は 5,464 m²で、設計は逓信省営繕課の山田守、施工は大倉土木である。

敷地は熊本市花畑町の電車通りに面した場所で、藩政期には藩主が住んだ花畑屋敷、また明治以降は第六師団歩兵第二十三連隊があった場所である。建物は L 字形で北側の主屋部の東面が電車通りに面している。(写真①) L 字形の交差部に玄関ホール、階段、エレベータなど主要動線を配置し、主屋部は一室型の広い事務室で、その奥に原簿室が配置され、地下階には、職員食堂、調理室、休憩室、更衣室など福利厚生が配置されている。

2) 建物が有する価値と意義

山田守は東京帝国大学建築学科を 1920 年に卒業の後、旧逓信省に入り、営繕課の技師として活躍し、数多くの優れた建築作品を全国に残している。学生時代すでに同志とともに、分離派建築会を組織し、日本での先駆的な建築を目指し、日本の近代建築史に名を留めている。熊本市には彼の作品として旧熊本貯金支局のほかに、旧逓信病院（熊本森都総合病院）が残されている。

旧貯金支局の建物は、山田守が欧米視察によって近代合理主義の影響を受けて、機能主義に基づいて設計した建物としてよく知られている。この機能性の追求は、動線を L 字形の要にあたる中央部にまとめた配置や、窓を広く取った明るい事務室の採光（写真②）だけでなく、中央暖房の導入、垂直動線として導入した熊本で現存最古のエレベータ、事務室と原簿室を結ぶ原簿用ベルトコンベア、上下階を結ぶメールシュータなど、当時最先端

の設備の導入にも現れている。地階には食堂、男女更衣室や休憩室なども導入され、職員の福利厚生にも先駆的試みが行なわれ、現代の事務所建築に通じる考え方が提案されている。

構造は、初期のコンクリート構造によく見られる組積造をコンクリート造に転換しただけのものではなく、柱と梁を格子状に組んだ合理的な構造システムとして考えられた現代のラーメン構造にほぼ近い構造となっており、ここにも近代建築としての合理性の追求が見られる。

外装としてこげ茶色のタイルを用い（写真④）、官庁建築としての重厚さを感じさせ、広い窓を配置した外観は、日本の官庁事務所建築の発展期を画している。また、その重厚さを和らげるかのように建物各所の出隅部には丸みを用いた柔らかい意匠を施している。（写真③⑤）この外観の色や材料は、すぐ傍に位置する熊本城の黒白の外観を意識したものとされ、また隣接していた旧日本勧業銀行熊本支店の、ギリシア式円柱を用いた銀行建築の白い外観と対照をなす、衆目を集める新しい外観であった。これにより、当時再開発された市内中心部の広い目抜き通りに面し、隣接の旧日本勧業銀行熊本支店や旧熊本市庁舎とともに、熊本の新しい都市景観を創出した。

旧貯金支局の建物はこのように、当時まだ木造の建物が殆どであった熊本の中心部に、最新の鉄筋コンクリート建築として、熊本の経済発展の期待を大きく担って建てられた。日本の官庁事務所建築として先駆的役割を果たしたのみならず、熊本にとってもその都市的発展の象徴的な意味をもつ建物であった。さらに市内中心部の殆どを焦土と化した第二次大戦の空襲にも残り、戦後復興のとき多くの熊本市民を勇気づけた建物である。

以上のように、旧熊本貯金支局は、1) 逋信省技師であった建築家山田守による近代主義にもとづく機能主義的作品の代表作の一つであること、2) 昭和初期の日本の官庁事務所建築の発展期の優れた代表作品の一つであること、3) 熊本市中心部にあって近代的都市景観の形成の大きな役割を果たし、第二次大戦の空襲にも残り、熊本市民を勇気づけてきた重要な作品であること、4) 熊本の近代建築史上、時代を画する重要な作品である。

以上の理由から、この建物を保存利活用して残していくことは、熊本のすぐれた建築文化を継承していく上できわめて重要である。

旧熊本貯金支局写真



①外観。外装はタイルであったが、現在モルタルで塗られている。



②執務室内観。



③受付。出隅部分の曲線が特徴。



④地下部分。本来の外装のタイルが残る。



⑤階段見上げ。

(①から⑤：撮影 伊藤重剛)